

「シリーズ／比較民話」

(一) 瓜子姫／三つのオレンジ

高木昌史

〔註〕本稿は、(一) 瓜子姫／三つのオレンジ、(二) 天人女房／白鳥乙女、(三) 三枚のお札／水の魔女、(四) 踊る骸骨／歌う骨、以上四篇から成るシリーズ「比較民話」の第一回目である。

序

今年二〇二二年は、グリム兄弟 *Brüder Grimm* (兄ヤーコブ *Jacob* [一七八五—一八六三] と弟ヴィルヘルム *Wilhelm* [一七八六—一八五九]) が彼らの『子供と家庭の童話集』*Kinder- und Hausmärchen* (以下 *KHM* と略記) の初版第一巻を刊行してから二百年を迎えた。¹⁾ また一方、

わが国の口承文芸学を樹立した柳田國男(一八七五—一九六二)が没してから半世紀が過ぎた。²⁾ その間、神話、伝説、昔話といったジャンルの重要性は、文芸学、民俗学、心理学そして教育学等、様々な分野でますます深く認識されてきたが、中でも、その集大成を目指して現在ドイツで刊行中の『昔話百科事典』*Enzyklopädie des Märchens* (以下 *EM* と略記) は、空前絶後の大事典として注目を浴びている。³⁾

グリム兄弟が *KHM* に付した「原注」*Originalanmerkungen* ⁴⁾ を出発点に、その後幾つかの貴重な試みがなされた後、ドイツの民俗学者クルト・ランケが企画・構想し、多くの専門家の執筆・協力のもと、右の『昔話百科事典』は、一

九七七年に第一巻が刊行され、目下第十三巻 (Ver-の項) まで進捗し完成が俟たれているが、その副題は「物語の歴史・比較的研究のための辞典」Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung を謳っている。⁽⁶⁾ 翻つて、わが国でも、実は、柳田がこの「歴史的・比較的研究」に着手している。特にジュネーヴ滞在(一九二一—二三年)以後、彼は口承文芸を国内および国際的なレヴェルで比較研究した(『昔話と文学』所収「うつぼ舟の王女」「鳥言葉の昔話」、『昔話覚書』所収「味噌買橋」等)。本シリーズでは、EMの成果も活用しながら、柳田が開拓した昔話(民話)の比較論を数例試みることにしたい。今回は日本昔話「瓜子姫」と西洋昔話「三つのオレンジ」を扱う。

一 瓜子姫

柳田國男が強い関心を抱いた日本昔話の一つは「瓜子姫」である。⁽⁷⁾ 東北から九州まで広く分布する「瓜子姫」の中から、彼は出雲の話を『日本の昔話』(一九三〇年初版)に収録したが、その粗筋は次の通りである。

昔々、爺と婆がいた。爺は山で薪を伐り、婆は川で洗濯をしていた。ある日婆が川へ行くと、川上から瓜が流れてきた。拾つて割ると、中から小さな美しい女の子が出てきたので、瓜子姫と名付け可愛がつて育てた。好い娘に成長した姫は毎日機を織った。鎮守様のお祭りに娘を連れて行くため、爺と婆は駕籠を買いに出かけた。留守をしながら娘が機を織っていると、あまのじゃくが来て、戸を少し開けてくれと言った。瓜子が警戒して細目に開けると、あまのじゃくは恐ろしい手で戸を開け、柿の実を取つてやると言つて、瓜子を裏の畑へ連れ出し、裸にして柿の樹に縛りつけた。あまのじゃくが瓜子の着物を着て化け機を織っていると、爺と婆が帰つて来た。二人はあまのじゃくを駕籠に乗せ、鎮守様へ詣ろうとした。すると、裏の柿の樹の陰から本当の瓜子姫が(偽の)瓜子を乗せないでと大声で泣いた。爺婆は驚いて引き返し、爺が鎌であまのじゃくの首を切り黍の畑に棄てた。黍の茎が赤いのはそのためである。⁽⁸⁾

冒頭の「瓜」を「桃」に置き換えれば桃太郎の話になるこの昔話に、柳田は大いに注目し、最初の口承文芸論「桃太郎の誕生」(一九三二年)所収の「瓜子織姫」を発表した。⁽⁹⁾その中で、「桃太郎の桃が瓜子姫の瓜よりも後のものであったことは、そう多くの臆測を借らずとも容易にこれを認めることができる」として、彼は、一般に知名度の高い桃太郎よりはむしろ瓜子姫に、本の題名とは裏腹に、多くの紙数を割いた。

桃太郎と瓜子姫、二人はいずれも果実から生まれた異常誕生のいわゆる「小き子」で、周知のように、前半のストーリー展開は類似しているものの、後半は、一方は鬼が島で鬼を退治した英雄、他方は天邪鬼に襲われるか弱い娘を描いており、対照的である。しかし、と柳田は語る。「異常の経過を取って人界に出現した童子が、後に成長して異常の事業をなし遂げたという要点」において、両者は「左右一対」である。⁽¹⁰⁾

『日本昔話名彙』(一九四八年初版)の中で柳田は、「桃太郎」と「瓜子姫子」を、「一寸法師」等とともに、「完形昔話」の〈誕生と奇瑞〉に分類し、⁽¹¹⁾前述「瓜子織姫」論の中でこう述べている。「川上の清く高き処」から流れ来た

瓜子姫(≡異常の誕生)、卓越した機織りの技能を持つ(≡異常の事業)彼女の姿には、織姫≡神に仕える少女≡巫女という遙かな宗教的要素が投影されている、と。⁽¹²⁾この観点から見れば、「瓜子姫」は確かに〈誕生と奇瑞〉タイプに属しているのかも知れない。さらに興味深いことに、柳田は「瓜子姫」に「いわゆるダナエ神話のこの島に来てからの変化」⁽¹³⁾を想像する。ギリシア神話によれば、娘の子に殺されるであろうという神託を受けたアルゴス王アクリシオスは、それを回避するため、黄金の雨(≡ゼウス)によつて赤子を産んだ王女ダナエを、赤子もろとも箱に入れて海に流す。遺棄された赤子(≡孫)はその後、様々な苦難を乗り越えて英雄(≡ペルセウス)に成長する。⁽¹⁴⁾この貴種流離譚に柳田は、わが国の「瓜子姫」物語のいわば祖型を見出したのである。そのテーマも興味深いが、本稿では、特に「敵対者」の観点から、「瓜子姫」を西洋の類話(「三つのオレンジ」/後述)と読み比べることにしたい。

一 A 「瓜子姫」——西日本型と東日本型

前述出雲の「瓜子姫」話。爺と婆が出掛けたあと、瓜子が留守番をしながら機を織っていると、あまのじゃくが来

て、作り声で戸を開けてくれと願ひ、細目に開いた戸に手を差し込み侵入する。柿の木に瓜子姫を縛り付けたあまのじゃくは姫に化けるが、最後に爺に退治され、姫は助かる⁽¹⁵⁾。柳田が「瓜子織姫」論で紹介している石見（島根県）の「瓜子姫」も同様のストーリーである。本当の花嫁（瓜子姫）は柿の木に縛られ、偽の花嫁（あまのじゃく）を爺と婆は、それと気付かず、「嫁にやる」ため駕籠に乗せる。が、姫の泣き声で真相を知った駕籠かきが、あまのじゃくを退治し、姫は木から助け下ろされる⁽¹⁶⁾。

以上は西日本の話である。それに対して、東日本の「瓜子姫」は破局的な最期を迎える。例えば、福島県の「瓜姫」。姫が留守をしていると、あまのじゃくが現れ、戸から押し入り、姫を「頭からむしゃむしゃ食つて」しまう。瓜姫の着物を着て姫に化けたあまのじゃくは、駕籠に乗って長者の家に祝言に出掛けるが、途中、雀の大群が真相を暴く。しかしあまのじゃくは雀たちを萱の根元で食い尽くす⁽¹⁷⁾。新潟県の「瓜姫」では、留守をしていた瓜姫のところ「天邪鬼」が現れ、姫に「乗りうつる」。姫は最後に死んでしまう⁽¹⁸⁾。佐々木喜善の『聴耳草紙』に収録された七篇の「瓜子姫子」（岩手県）も、すべて悲劇的な幕切れである。

る。「山母」（その二）、「アマノジャク」（その二、四、五）、「隣の娘」山姥」（その三）、「山の狼」（その六）、「怪しい者」天ノ邪鬼」（その七）、彼らはみな姫を殺す。しかも「狙の上」にのせて、「包丁」で頭、手、脚を切り刻み、残りを煮る（その六）、という具合に、まさに恐怖物語の様相さえ帯びている⁽¹⁹⁾。

柳田國男が一九一〇年に刊行した『遠野物語』の中の「おりこひめこ」（一七番）はこうだ。「トト「父」とガ「母」が娘の嫁支度を買いに町へ出かけている留守に、「昼の頃ヤマハハ来たりて娘を取りて食ひ、娘の皮をかぶり娘になりてをる」。翌日、鶏の鳴き声で、両親は事態に気付き、姫に化けたヤマハハを馬から下ろして殺す。そして糠屋の隅に多数の娘の骨を発見する。これ⁽²⁰⁾もまた恐怖（残酷）物語である。

柳田は、これについて、「その骨を繋ぐと不思議な力で、復活してもとの美しい姫になったという風な、また別の話し方がもとあったのではないか」（『昔話と文学』一九三八年刊「かちかち山」と推測する。また別の個所で、東北における瓜子姫子の話では、姫がみな殺されてしまい、「結末の明るさがない」が、この郡（岩手県北部）で採集され

た一例では、木に縛られた姫が爺婆に助けられたことになっており、「こちらがおそらく一つ前の形であったろう」と結論する（『昔話覚書』一九四三年刊「二戸の昔話」を讀む²²）。さらに「辞書解説原稿」「瓜子姫」の項で、柳田は、「昔話にハッピーエンドを持たぬものは無い」とし、「喰われたとある場合でも、元は恐らくは再生の悦びを附け添へてゐたのであろう」と解説する²³。

以上、総じて、「瓜子姫」は西日本にその原型をとどめ、東日本の話の多くは後のヴァリエーションを示している、と柳田は認識していたようである。「瓜子姫」の地域差は様々な考察を誘うが、前述「瓜子織姫」（『桃太郎の誕生』）論の眼目の一つは、姫の敵アマノジャクである。柳田はそこで興味深い分析を試みている。

一 B アマノジャク

グリム童話「狼と七匹の子山羊」（KHM五）の狼のように、作り声を使って瓜子姫に近づき、戸の隙間から侵入して、多くの場合、姫を食べてしまうアマノジャクとは一体どのような存在なのだろうか。

『日本国語大辞典』²⁴によると、「あまのじゃく」（天邪鬼）

は、（1）民話などに悪役として登場する鬼。天探女「あまのさぐめ」に由来するといわれる。（2）何事でも人の意にさからった行動ばかりすること。また、そのような人。さま。ひねくれ者。つむじまがり。（3）仏像で、仁王や四天王の足下に踏みつけられている小悪鬼、等である。

（1）「天探女」は、『古事記』上卷（葦原中国「あしはらのなかつくに」平定²⁵）の中で、天照大神の命に背いた天若日子「あめのわかひこ」（『日本書記』「神代」下では天雅彦²⁶）の責任追及のため高天原から遣わされた雉の鳴き声を聞いて、その声が悪だとし、雉を射殺しよう天若日子に勧めた女神である。放たれた矢は雉を貫き、天照大神と高木神「たかきのかみ」（『高御産巢日神』「たかみむすひのかみ」）の許に達する。高木神は、血のついた矢の羽を見て、天若日子に与えた矢であることを知り、後者に邪心があるなら、矢に当たって死ぬ、と天からそれを突き返す。矢は天若日子に命中、彼は死ぬ。（「返し矢」の由来）。人の邪念を探って唆した天探女は、こうして、人の意に逆らう邪悪な存在・心理⇨アマノジャクに転化したよう²⁷だ。

柳田國男は語る。「日本の昔話として我々の最も注意す

るのは、瓜子姫の敵の名がアマノジャクであったという点である。アマノジャクが神の計画の妨碍者であり、しかも通例は〈負ける敵〉であったことは、弘く他の民間伝承にも認められる（「瓜子織姫」²⁸）。意地悪で常に神に逆らうものの、神に匹敵するほどの力はなく、「常に負ける者の憎らしさと可笑味とを具えていた」²⁹「ワキ役」、アマノジャクの本性を柳田はそこに見る。

ところで、瓜子咄の最古の記録は、柳田も指摘するように、江戸後期の国学者、喜多村筠庭「いんてい」（＝信節「のぶよ」）（二七八三―一八五六）著『嬉遊笑覧』（一八三〇年成立）巻九とされる。庶民生活の史料、伝承文化の集成として知られるこの書物には次のように記されている。

「瓜姫の話などは是なり。今江戸の小児、多「おおく」は此話を知らず。桃太郎と同類の話にて、老婆洗濯してある処へ、瓜流れ来れば拾ひとり、家に帰りて老父に喰せむとて割たれば、内より小「ちいさ」き姫出たり。いつくしき事限りなければ夫婦喜び、養ひて一間なる内におく。姫生ひ立て機織「ハタ」をる事をよくして、常に一間の外「ト」に出ず。ある時、庭の樹に鳥の声して、

瓜ひめの織たるはたのこしに、あまのじゃくが乗たりと聞えけるに、夫婦あやしと思ひて、一間の内に入て見れば、あまのじゃく瓜姫を縄もて縛りぬ。夫婦驚きて是をたすけ、あまのじゃくを縛りて、此奴「コヤツ」薄の葉にてひかんとて、すすきの葉もてひき切「きつ」て殺「ころし」ぬ。今も芒「ススキ」の葉のもとに赤く染たるは、その血の痕「あと」なりといふ物語、郷下「井ナカ」には今も語れり（信濃の人の語るを聞しことあり）。³⁰桃太郎の話といづれか先なる」。

『嬉遊笑覧』の「瓜姫」は、簡潔な話の中に、川上から流れ着いた瓜＝貴種流離譚、瓜から生まれた小さな姫＝小さ子、機織りの名手に成長した姫＝神に仕える娘＝巫女、真実を知らせる鳥の声＝鳥言葉の昔話、瓜姫と入れ替わったあまのじゃく＝すり替えられた花嫁のモチーフ、芒の赤い根元＝葉で殺害されたあまのじゃくの血＝由来譚、といった具合に、昔話を構成する幾つかの要件を兼備している。ここでも、瓜姫の敵あまのじゃくは最後に老夫婦によつて退治される。柳田のいわゆる〈負ける敵〉の典型である。「桃太郎の話といづれか先なる」に関して、柳

田は瓜子姫が先と見る⁽³¹⁾。そして最後にこう語る。「人生の理想の幸福のためには、アマノジャクなどはいない方がよかったのだが、退いてこの現実の不如意をあまなまた楽しもうとするには、彼もまた闕「か」くべからざる大切な役者であった⁽³²⁾」。

「ワキ役」、「役者」等、演劇用語を駆使しながら、柳田は瓜子姫物語におけるアマノジャクの役割を右のように総括する。思うままにならない現実を受け容れ、逆にそれを楽しむために不可欠な存在、しかも素姓としては悪魔の系譜に属する天邪鬼は、日本昔話「瓜子姫」に独特の魅力を与えるキャラクターなのである。

思えば、主人公が最後に救出される西日本型の「瓜子姫」は、否応なく日常に割り込んでくる悪や危機（アマノジャクはその象徴である）を物語の基軸に絡ませながら、必ずしも順調・平穏には進行しない現実を負の側面もとも映し出すことで、逆にそれを乗り越える勇氣と希望そして知恵を人々に与えてくれるのかも知れない。「瓜子姫」物語は、『嬉遊笑覧』が示す通り、恐らくはこの西日本型を原型として、様々な類話が生まれたに違いない。悲劇的な終末を迎える東日本型の「瓜子姫」は、恐怖と教訓の要

素を強調した派生型と言える。それにしても、柳田の「現実の不如意」は言い得て妙である。読み方次第ではある種の諦念とも取れるが、人生の真実がそこに凝縮されているために、彼は敢えてこの表現を用いたのではあるまいか。昔話の奥深さを彼はそこに認めたのである。

二 三つのオレンジ

昔話タイプの国際基準から見た場合、「瓜子姫」はどのように位置づけられるのだろうか。池田弘子は「瓜子姫」Melon Princess... Uriko Himeを四〇八Bに分類し、四要素を物語の骨子として掲げる（Hiroko Ikeda: A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature, 1971）。すなわち、一「瓜からの誕生」、二「殺害」、三「アマノジャクの正体が暴かれる」、四「結末」である。池田は最後に、「大いに熟考したあと、これを四〇八Bに分類することに決めた」とし、物語の冒頭が三〇二「桃太郎」Peach Boy or Momotarōと同じであると、アマノジャクを「女鬼」an ogress（「鬼」ogreの女性形）と英訳している。

ところで、アールネ／トンプソンの「昔話のタイプ」

(A. Arne/S. Thompson: The Types of the Folklore, 1962) (以下A Tと略記³⁴⁾)の四〇八番は「三つのオレンジ」The Three Orangesを題名に掲げている。池田は「瓜子姫」をその類話と見做したのである。そこで比較考証のために、西洋版のテキストとして、『スペイン民話集』(三原幸久編訳)所収の「三つのオレンジ」を初めに読んでみることにしたい(以下要約)。

二 A 「三つのオレンジ」

昔、王様に一人の王子がいた。成長して王位についた王子は、花嫁探しの旅に出かけた。泉で水を飲むとすると、水に三つのオレンジが映っていた。オレンジを採って割ってみると、最初のオレンジから一本の櫛、二番目のオレンジから鏡が出てきた。そして三番目のオレンジからは綺麗な乙女が現れた。乙女は裸だった。そこで王様は宮殿へ服を取りに帰った。途中、彼はあの人と結婚しよう、と言いつづけた。

王様が去ると、ジプシーの魔女が水を汲みに来た。そして水に映った乙女を見て、それを自分と勘違いし、己の(?)美しさゆえ下女の仕事を厭になつて壺を壊した。

その時、彼女は木の上の乙女に気づいた。魔女は髪に櫛を入れさせてくれるよう乙女に執拗に言い寄り、遂に承諾させた。魔女は櫛を入れながら、頭に黒いピンを突き刺して乙女を一只の鳩に変身させ、代わりに木に登った。服を持って戻った王様は乙女(ジプシー)が何故に黒くなったのか尋ねた。日に焼けたからと答えたジプシーを王様は宮殿に連れ帰って結婚した。数日後、農夫たちが畑に行くと、鳩が来て、王様と王妃の様子を聞いた。農夫はそのことを王様に伝えた。翌日も同様で、王様はその次の日に鳩を捕えてくるように農夫に命じた。食事中、綺麗な鳩を褒めながら撫でていた王様は、頭にピンが刺さっているのを発見し、それを抜いた。すると鳩は美しい乙女に変身した。乙女は王様にその間の出来事を話した。王様は乙女と結婚し、ジプシーの魔女は焼き殺され、灰は風に飛ばされた。³⁵⁾

短いながら見事に起承転結を具えた昔話である。第一第二のオレンジから出てくる呪術的な小道具、「櫛」と「鏡」は、わが国ではすでに『古事記』にも見られ、³⁶⁾その共通性が興味深い。三番目に現れる「綺麗な乙女」は、「桃太郎」

や「瓜子姫」の場合とは異なり、最初から乙女の姿で、しかも裸である。王様は彼女に恋するが（本当の花嫁）、彼の留守中、ジブシーの魔女が乙女の頭にピンを刺して殺し（乙女は鳩「魂の鳥」霊鳥」となる）、花嫁の地位を奪ってしまふ（偽の花嫁）。しかし王様がピンに気づいてそれを抜くと、乙女は復活する。魔女は罰せられ、王様と乙女は結婚する。

「瓜子姫」＝「オレンジの乙女」、「アマノジャク」＝「ジブシーの魔女」、日本とスペインの民話は、主人公（前者）と敵対者（後者）が演じる「本当の花嫁と偽の花嫁」のドラマである。続いてイタリアの類話を覗いてみたい。

二 B 「三つのシトロロン」

ところで、「三つのオレンジ」物語の最古の類話は、十七世紀イタリアの作家バジレの「三つのシトロロン」（「ペントメローネ」第五日第九話）に見出される。ストーリーは右のスペインのものと同じだが、語りはバロック的になるかに詳しい。粗筋はこうである。

王子の花嫁探しの旅は、ジェノヴァからジブラルタル

海峡を経て西インド諸島、そして鬼女の島に向かう。その後、王子はある老婆から三つのシトロロンをもらい、イタリアへの帰路に着く。一つ目と二つ目のシトロロンから乙女が出て来て直ぐに消えると、三つ目のシトロロンからは「ヨーグルトデザートみたいな美女」が現れる。王子は裸の美女（妖精）のために服を取りに戻る。その間、黒い奴隷女が、水に映った妖精の姿を自分だと思ひ込む。その後、ピンによる殺害、鳩への変身等々、物語は進行する。王子は奴隷女と結婚し王様になる。王妃の命令で鳩は料理人に捕えられ殺されるが、その羽からシトロロンの木が生え、果実から現れた乙女が王様に真相を暴露する。王様と乙女の婚礼の準備が新たに整えられ、悪い王妃（奴隷女）は火刑となる。³⁷

アールネ／トンブソンの『昔話のタイプ』によると、AT四〇八「三つのオレンジ」は、イタリア、スペイン、ギリシア等、南欧の他、チェコ、ロシア、トルコ、また中南米のキューバやチリ等に広く分布する有名な昔話である。³⁸この物語の構成要素は、一「老女の呪い」、二「オレンジ姫の獲得」、三「黒人女性がオレンジ姫とすり替る」、四

「鳩となったオレンジ姫」、五「木となったオレンジ姫」、六「ヒロインの魔法が解ける」、七「恋人の再会」の七つである。

右を指標にスペイン版「三つのオレンジ」とイタリヤ版「三つのシトロロン」を比較すると、一は後者のみ、二はオレンジシトロロン、三はジブシーの魔女黒い奴隷女、四は共通、五は後者のみ、六は前者では王様がピンを抜き、後者ではシトロロンの乙女が出現することによって可能となる。七は共通である。以上、多少の異同はあるが、両物語はいずれも「本当の花嫁と偽の花嫁」（すり替えられた花嫁）のモチーフを中心に展開される。

西洋の民話「三つのオレンジ」および「三つのシトロロン」をわが国の「瓜子姫」と読み比べた場合、まず浮上してくる共通点は、果実からの乙女の誕生（オレンジ／シトロロン／瓜）、敵対者（ジブシーの魔女／黒い奴隷女／アマノジャク）による乙女の殺害（あるいは仮死状態―木に縛られる等）、そして敵対者の正体が暴かれるクライマックス。すなわち、「偽の花嫁」の陰謀が暴露されて罰せられ、「本当の花嫁」が本来の地位を回復するハッピーエンドである。そこで以上三点について詳しく比較検討してみるこ

とにしたい。

三 A T四〇八の東西

『日本昔話名彙』の中で柳田國男は「瓜子姫子」を「桃太郎」や「一寸法師」とともに「誕生と奇瑞」に分類した。⁽³⁹⁾ 桃太郎（小さ子）あるいは（申し子）の中でも、男性の主人公が、桃太郎のように、鬼を退治して世の中に貢献するのに対して、女主人公である瓜子姫は、そうした英雄的な行為ではなく、機織りの技術と器量の良さによって、最後は長者の花嫁となる（西日本型）。柳田は二つの昔話の相違をこう説明する。桃太郎には「肝要なる妻問ひの一條が省かれてゐるが、瓜子姫はやはり婚姻を以て完成の一つに数へてゐる」（『辞書解説原稿』「瓜子姫」⁽⁴⁰⁾）。この「婚姻」に關しては後述することにし、初めに、「誕生と奇瑞」に觸れておきたい。

三 A 果実からの誕生

「桃太郎」と「瓜子姫」、そして「三つのオレンジ」に共通しているのは、果物からの誕生という（奇瑞）である。

ロシアの口承文芸学者V・プロップによれば、「妊娠するために果実を食べる習俗」は世界中すべての文化的な発展段階に見出されると言う。シベリアでは林檎、スマトラのマレー人のココナッツ、ボヘミアのネズの実、ギリシア神話では柘榴等、彼は豊富な例を挙げる。⁽⁴¹⁾ イギリスの人類学者フレイザーの共感呪術の理論を引用しながら、プロップは、果実（植物）の豊饒力がそれを食べる人間に「呪術的に移る」民間信仰に注目する。⁽⁴²⁾ ところで、桃太郎と瓜子姫は川上から流れ着いた果物から生まれる。柳田は、興味深いことに、その著『桃太郎の誕生』の中で、子を欲しかった婆が「股」「もも」に孕んで小さな子を生んだ、それでモモ太郎と名付けた」という類話を紹介する。「桃」の豊饒性が、同音異義の「股」に転移したと見ることも出来るが、例えば、『御伽草子』の「一寸法師」では、姥は「四十に及ぶまで、子のなきことを悲しみ」⁽⁴³⁾ 住吉に参詣し、四十一にして男子を儲ける、と語られている。福島県の「瓜姫」では、子のいない爺と婆は、山の神に子宝を願う。すると、川上から大きな瓜が流れてきて、中から女の子が生まれる。⁽⁴⁴⁾ これは、山の神の取り計らいで川上から流れて来た果物（桃／瓜）の豊饒力が、それを拾って食した四十代女性の

妊娠を促した、と読むことも出来るかも知れない。柳田は、流れ着いた桃や瓜に「川上の未知数」、「川上の清く高き処にある」⁽⁴⁵⁾ 「異常の力」を想定し、「瓜子姫」昔話に一種の貴種流離譚を認め、「桃」に中国の影響を認める一方、「瓜」に「多分の霊怪味」を感じして、物語の原像をそこに探る。⁽⁴⁶⁾ 西洋の「三つのオレンジ」タイプの場合はどうか。スペイン民話では、三つのオレンジから「櫛」と「鏡」が出たあと、最後に「綺麗な乙女」が「真っ裸」で現れる。イタリア民話では、三つのシトロロンからそれぞれ乙女が現れるが、最初の二人はすぐに消え、最後に「妖精」が出てくる。彼女は「いかなる尺度でもはかれない」美女で、「どんな罪のないひとでも、彼女を見れば、欲望の絞首台に送られたことでしょう」と、バジレは彼一流の比喩を駆使して語る。⁽⁴⁷⁾ スペインとイタリア、いずれの民話においても、果実から現れるのは、桃太郎や瓜子姫のような（小さき）ではなく、成人女性、しかも裸である。

『昔話百科事典』（EM）によると、AT四〇八「三つのオレンジ」はベルシヤ起源の物語とも言われる。主人公の鳥（鳩）や樹木（オレンジの木）への変身には東洋的な輪廻思想 Metempsychose（魂の一遍歴）が認められ、それ

がヨーロッパの魔法昔話に受容されたと推察されている⁽⁴⁸⁾。果実から乙女への変身、乙女の鳩への変身、さらに（鳩の羽から生えた）果実から乙女への変身に、輪廻思想は投影されているのかも知れない。

「瓜子姫」はどうだろうか。福島県の「瓜子姫」では、女主人公はあまのじゃくに食べられてしまうが、物語の末尾で、「瓜姫の乗り駕籠に、あまのじゃくが乗ってるわ」と囃し立てる雀に、我々は霊鳥 *Seelenvogel* となった彼女の姿を認めることが出来る⁽⁴⁹⁾。また新潟県の「瓜姫」でも、天邪鬼が瓜姫に乗り移ったあと、爺さまが裏の畑に行くと、「一羽のきれいな小鳥」が飛んで来て、「瓜姫の機に天邪鬼がのつたいよ／若衆おうてくりやれ、ほーほー」と鳴く。これもやはり本来の瓜姫が霊鳥となった姿に他ならない。さらに柳田國男の『日本の昔話』に収められた出雲の「瓜子姫」では、機を織っていた瓜子をあまのじゃくが裏の畑に連れ出し、裸にして柿の樹に縛り付け、自分が瓜子の着物を着て駕籠に乗り鎮守様に詣でようとする。すると「柿の樹の陰」から瓜子姫があまのじゃくを駕籠に乗せないようにと泣く。ここで女主人公は樹木と一体となっている⁽⁵¹⁾。

以上、「瓜子姫」の昔話に我々は輪廻思想の遙かな名残

を読み取ることが出来る。これを「三つのオレンジ」東洋起源説（EM）と照合するならば、AT四〇八タイプの東西昔話の深い繋がりが垣間見えてくるのではあるまいか。

三B 敵対者

「瓜子姫」の敵対者アマノジャクに関してはすでに触れたので（一B）、ここでは主に「三つのオレンジ」タイプにおける敵対者に言及し、最後に比較考証をすることにした。たい。

スペイン民話「三つのオレンジ」。オレンジから生まれた裸の「綺麗な乙女」を見初めた王様は、乙女のために宮殿へ衣服を取りに行く。その間、「ジプシーの魔女」が乙女に近づき、その頭にピンを刺して一羽の鳩に変身させてしまう。花嫁の地位を狙ったのである。

「放浪の民」の代名詞ともなっている「ジプシー」*Zigeuner* は、今日、ドイツ系はジント *Sinto*（複数形 *Sintei Sinti*）、非ドイツ系はロム *Rom*（複数形 *Roma Roma*）と称されるが、彼らの由来に関しては十五世紀以来、タタール、エジプト出身、ユダヤ人等、様々な説が語られた。遠くインドからヨーロッパへ旅してきた人々であることが判明し

たのは、ようやく十八世紀中葉である。彼らは医術や馬に関する豊かな知識を持ち、楽器の演奏や舞踏の技に優れ、鑄掛屋や見世物興業などを職業としていたが、生活環境はその非定住性もあって、きわめて厳しかった(阿部謹也『中世を旅する人びと』⁵³)。現代の統計(一九七〇年代)では、人口は全体で五〇〇〜六〇〇万人を数え、ポーランドとスペインに特に多く(各八〇万人)、他、チェコ、ルーマニア、ハンガリー等の東欧、フランス、ロシア、アメリカ合衆国そしてドイツ等を生活圏としているようである。⁵⁴

スペインでは、フェルナンド五世(一四五二―一五一六年)の時代、容赦ないカトリック精神の下、ユダヤ人やムーア人の排斥運動が行われ、一四九九年、ジプシーに反対する国法も発布され、以後、三世紀が経過し、十八世紀の啓蒙の時代(カルロス三世の頃)⁵⁵にようやく、彼らに定住権を与える努力がなされた。「三つのオレンジ」中の「ジプシーの魔女」には、このようなジプシーの受難の歴史が反映されているのかも知れない。

一方、(ジプシーの)「魔女」もスペインを含む広くヨーロッパの社会史の断面を示している。中世末期から十八世紀にかけて、西洋では魔女裁判の嵐が吹き荒れたが、⁵⁶ドイ

ツでドミニコ会士H・インステイトーリス Institoris と J・シュプレングャー Sprenger が『魔女への鉄槌』 Malleus maleficarum を刊行し(シュトラーズブルク、一四八七年)、スペインでも厳格と残酷さで有名なドミニコ会士、初代宗教裁判長の T・d・トルケマダ Torquemada が『教程書』 Instruciones de los inquisidores (セビーリヤ、一四八四年)を発表し、その後の異端審問の土台を作った。スペインは回教徒やユダヤ人が多かったこともあり、異端審問は苛烈を極めたが、⁵⁷前述のように、ジプシーもまた差別される側の存在であったことから、「三つのオレンジ」における主人公の敵役である「ジプシーの魔女」は二重の意味で当時の社会を色濃く反映している。昔話が時代や社会の相貌を示す貴重な史料でもあることを、「三つのオレンジ」は実証している。

「三つのオレンジ」タイプ最古の物語、バジールレの「三つのシトロン」(『ペンタメローネ』)はどうだろうか。三つ目のシトロンから出てきた美女(妖精)を榎の木の空洞に残し、王子が衣服を取りに戻っている間に、「黒い奴隷女」が妖精に近づき頭にピンを刺すと、妖精は鳩に姿を変え飛び去る。ここにも実は、歴史が明瞭に刻印されている。

奴隸制 Sklaverei⁽⁵⁸⁾は、戦争捕虜などが契機となつて地上の様々な地域で生まれた社会的な従属関係で、ヨーロッパでは古代ギリシアやローマでも行われていたが、キリスト教国家では十世紀以降ふたたび盛んになったようだ。地中海の港町では特に、奴隸売買が成功を収め、トルコ、北アフリカ、スペインの他、スラヴ諸国のイスラム民族から奴隸がもたらされた。そして十五世紀にポルトガル人がアフリカ海岸を発見するに至つて、無数の黒人が奴隸市場で売買された。奴隸制が廃止されたのは、殆ど十九世紀になつてからである(デンマーク、イギリス等)。それ故、バジレが『ペンタメローネ』を執筆していた十七世紀前半にはすでに、アフリカ出身の黒人奴隸がヨーロッパ諸国で多数生活していた。イタリア作家は彼らの在り様の一端を「三つのシトロン」に表現したのである。

以上、スペインの「三つのオレンジ」およびイタリアの「三つのシトロン」に登場するジブシーの魔女や黒人女性の奴隸は、物語の主人公の敵役として登場する。今日の人権思想から見れば論外だが、昔話というジャンルが、娯楽としての役割の他に、歴史的な資料、あるいは社会的なテクストとして、その機能を果たしていることを右の敵役

は証明している。「瓜子姫」の敵役であるアマノジャクが、一種の妖怪として、主人公を危機に陥れる恐怖の存在であるのに対して、西洋の敵役には階級や身分差を示す社会的な存在のニュアンスが強く感じ取られる。ちなみに、アールネ／トンブソンの『昔話のタイプ』は「敵」に *adversary* という用語を当てたが、*adversary* は、「友人」では「ない」*in + anicus* に由来するラテン語 *inimicus* を語源する。「敵」*enemy* とは異なり、「反対の」を意味するラテン語 *adversus* に由来し、名詞としては「(試合の)相手」の意にも用いられる。要するに、物語をスリリングに展開させる重要な構成要素に他ならない。ある意味、ゲーム的なキャラクターである。恐怖の対象というよりはトリックスター的な性格を帯びる柳田のアマノジャク観はむしろ、この *adversary* に近いのではあるまいか。

三C 本当の花嫁と偽の花嫁

「瓜子姫」と「三つのオレンジ」の物語を構成する最も大きな要素は、女主人公とその敵対者、換言すれば、本当の花嫁と偽の花嫁の対比である。先に引用したように(註40)柳田は「桃太郎」には求婚のモチーフが省略されて

いるが、それとは対照的に、「瓜子姫」は「婚姻を以て完成」すると語る⁶⁰。実際、「桃太郎」と「瓜子姫」は、前半こそ、川上から流れてきた果実（桃／瓜）からの誕生（異常誕生）という共通の展開を示しているものの、後半は、前者の男性的な英雄譚（鬼退治）に対して、後者は「器量がよく」「利口」で「機が上手」な娘に育った主人公が（少なくとも西日本型では）、あまのじゃくの妨害の後、長者の花嫁になる人生行路を描いている。物語のクライマックスは、柳田が指摘するように、「婚姻」である。

婚姻（結婚）という人生の一大イベントは、洋の東西を問わず、昔話の重要なモチーフとなっているが、「瓜子姫」の場合、花嫁になるはずの彼女に替わって、アマノジヤクが嫁入りの駕籠に乗る。しかし姫の泣き声あるいは鳥の鳴き声で正体がばれ、アマノジヤクは最後に退治される。スペイン民話「三つのオレンジ」はどうだろうか。王妃になるべきオレンジの乙女に替わって、彼女を鳩に変身させたジプシーの魔女が、王様と結婚する。イタリア民話「三つのシトロン」も同様に、黒い奴隷女が、シトロンから生まれた妖精を鳩に変え、後者に替って王子と結婚する。しかし魔女も奴隷女も、最後には悪事が露見して罰せられ、

乙女と妖精は本来の地位（花嫁）を回復する。

以上は典型的な「すり替えられた花嫁」*die unter-schobene Braut*のモチーフである。世界中に広く分布するこのモチーフの背後には、様々な歴史や慣習が潜んでいるようだ。（『昔話百科事典』EM⁶²）。最古の証拠は『旧約聖書』「創世記」第二十九章に見出される。伯父ラバンの許で七年間働いたヤコブが、約束通り、彼が愛する伯父の下の娘ラケルを花嫁として迎える結婚の初夜、ラバンは上の娘レアを替わりに差し向ける。騙されたヤコブが伯父に理由を訊ねると、後者は「我々の所では、妹を姉より先に嫁がせることはしないのだ」と答える。最後の「嫁がせることは」⁶³「しない」は、ルター訳聖書では「慣習」ではない「*Es ist nicht Sitte*」と訳されている。EMによると、この「慣習」は様々な民族の物語に見られると言われるが、これとは別に、中世ヨーロッパには、「すり替えられた花嫁」の有名な伝説が伝播していた。「大きな足のベルタ」である。

ハンガリーの王女ベルタは非常に美しかったが大きな足をしていた。彼女がフランク王国の国王ピピン三世（小ピピン）に嫁いだとき、随行した乳母の策略で、初夜の寝室

にその娘が替わりに入つて、王妃の地位に就いてしまった。森に棄てられたベルタは森番の家族に匿われ、数年後、ベルタの母親がパリに旅したとき、王妃の足を見て、それが自分の娘でないことを発見する。乳母は死刑となり、娘は尼僧となった。その後、狩りの森で、ピピンはベルタと再会する⁽⁶⁵⁾。十三世紀初期のフランスの年代記に最古のテクストが確認されるこの物語は、イタリア、スペインそしてドイツに広く伝承された⁽⁶⁶⁾。恐らく、ヨーロッパにおける「すり替えられた花嫁」の原像となったと思われるが、グリム童話「森の中の三人の小人」Die drei Männlein im Walde (KHM 一三)、「白い花嫁と黒い花嫁」Die weiße und die schwarze Braut (KHM 一三五)、「がちょう番の娘」Die Gänsemagd (KHM 八九)に、我々はその遙かな余韻を探ることが出来る⁽⁶⁷⁾。

A T 四〇八「三つのオレンジ」は、「すり替えられた花嫁」のモチーフによって、以上見るように、聖書や中世伝説といった伝承文学と深く結びついているが、もう一つ、別の解釈も存在する。最後にそれを紹介したい。

ドイツの口承文学者ルッツ・レーリヒ Lutz Röhrich は、様々な民族の結婚儀礼に、「すり替えられた花嫁」の

モチーフが見られることを指摘する⁽⁶⁸⁾。その種の儀礼において、花婿はすぐに花嫁とは結ばれない。花嫁と同じような衣装を着た、あるいは変装した乙女たち（偽の花嫁）の中から、彼は自分の花嫁を探し出さなければならない。この回り道には、レーリヒによると、「本当の花嫁」を悪霊の力による危険から守る意図があるようだ。昔話にしばしば見られる「すり替えられた花嫁」のモチーフの背景には、このように、「古代的な信仰観念」が残存しているのかも知れない⁽⁶⁹⁾。

わが国の「瓜子姫」や西洋の「三つのオレンジ」タイプの民話では、アマノジャクやジプシーの魔女、黒い奴隷女といった敵役が大きな役割を演じる。主人公（瓜子姫／オレンジの乙女）は、敵役の妨害のために、花婿（長者／王子）とは、様々な困難を乗り越えてようやく、出会うことが出来る。「本当の花嫁」と「偽の花嫁」のモチーフには、以上のように、様々な伝承文学や通過儀礼が介在しているようである。

結語

わが国の「瓜子姫」は、恐らくその原型である『嬉遊笑覧』が示すように、短い物語の中に、貴種流離譚、果実からの誕生、小さき子、機織り（巫女）、鳥言葉、由来譚といった昔話を構成する要件を多数含みながら、世界中に分布する「すり替えられた花嫁」のモチーフを展開する魅力的な民話である。

一方、スペイン版「三つのオレンジ」も、短い民話ながら、花嫁探し、呪的小道具（櫛／鏡）、果実からの乙女の誕生、魔法による変身（乙女から鳩／鳩から乙女）といった様々な要素の絡み合いの中で、やはり「すり替えられた花嫁」の物語を見事に繰り広げている。

東洋と西洋の昔話は、この共通のモチーフを核心部分にすることで、国際基準A T四〇八の世界を構築するのだが、中でも、主人公に対する敵対者、本当の花嫁に対する偽の花嫁の存在は、「瓜子姫」と「三つのオレンジ」いずれにおいても、きわめて重要な役割を演じている。敵対者として登場するアマノジャク（前者）やジプシーの魔女

（黒い奴隷女）（後者）のイメージは、ある意味、主人公以上に印象的である。彼女たちの存在によって、物語は一層その深みと魅力を増すのである。

それにしても、西洋昔話の敵対者（ジプシーの魔女／黒い奴隷女）のイメージには、階級社会の相貌が色濃く刻印されている。それに比べて、日本昔話の敵対者（アマノジャク）には、何か得体の知れない怪物性が内在している。ある時は瓜姫を喰い、ある時は木に縛り付けて、花嫁の地位を我が物にしようとするアマノジャク、その存在は、特に東北地方の民話では、山姥、山母あるいは狼のイメージと重なる（佐々木喜善『聴耳草紙』）。

柳田國男はこのアマノジャクに、ある種、トリックスターのな性格を認めていたが、別の観点から見ると、この怪物の背後には、何か歴史的なものが隠されているように思われる。例えば、「山姥奇聞」（『妖怪談義』所収）の中で柳田は、山姥のいわば〈原像〉として、1「大和民族渡来前の異俗人」（山人）、2「狼の首領」Ⅱ「老女」（山の神信仰）、3「山隠れる女」（狂女／産後の精神異状）を挙げる²⁰。東北民話のアマノジャクが山姥のイメージと融合することを考え併せると、右の三説は大いに興味深い。た

んに怪物というだけではない、アマノジャクの歴史性と現実性が仄見えてくるからである。

名著『昔話と現実』(Märchen und Wirklichkeit, 1979 [74])の中で、前述L・レーリヒは指摘する、「昔話(民話)はどれも現実と何らかのかたちで結び付いている」⁽¹⁾と。彼は、実際、口承文学に民族学/民俗学的な視点を導入することによって、この分野に新境地を拓いたのだが、「三つのオレンジ」タイプを読み解く場合、右の見解は特に重要と思われる。果実の民間信仰(プロップ)、敵対者の存在(ジプシー/黒人奴隸)、結婚儀礼(花嫁探し)等々、すべては昔話と社会(現実)との繋がりを証明している。わが国のアマノジャクも、この視点で捉え直すと、物語の世界は一層その奥行きを深めるに違いない。

註

- (1) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 3Bde., Hrsg. von Heinz Rölleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1980. (Reclam)
- (2) 以下、『柳田國男全集』全三十二巻(ちくま文庫版)か

ら引用し、必要に応じて『定本柳田國男集』(筑摩書房(定本)および『決定版柳田國男全集』(同)(決定版)を参照した。

- (3) Enzyklopädie des Märchens, Hrsg. von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1977ff. (EM)
- (4) Reclam, Bd.3.
- (5) J. Bolte/G. Polivka, Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Diederichs Verlag, Leipzig, Bd.1, 1913/Bd.2, 1915/Bd.3, 1918/Bd.4, 1930/Bd.5, 1932. (B/P), Handwörterbuch des deutschen Märchens, Hrsg. von Lutz Mackensen, Walter de Gruyter, Berlin, Bd.1, 1933/Bd. 2, 1940.
- (6) Enzyklopädie des Märchens, Bd.1 (1977).
- (7) 『桃太郎の誕生』「瓜子織姫」、『柳田國男全集』一〇所収、一九九〇年
- (8) 『柳田國男全集』二五所収、一九九〇年、八六一―八七頁
- (9) 初出は『旅と伝説』昭和五年五月
- (10) 註(7)、『一一七頁
- (11) 『日本昔話名彙』柳田國男監修/日本放送協会編、日本放送出版協会、昭和四七年(昭和三年初版)、目次
- (12) 註(7)、『一〇八、一一七―一一八頁
- (13) 同、一〇八頁
- (14) アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、

- (15) 二〇〇九(一九五三)年、七九—八〇頁
註(8) 参照
- (16) 註(7) 一〇五—一〇七頁
- (17) 『日本の昔話』上、稲田浩二編、ちくま学芸文庫、一九九九年、一五四—一六〇頁
- (18) 『日本の昔話』一、関敬吾編、岩波文庫、一九八九(五)年、一〇—一四頁
- (19) 『聴耳草紙』佐々木喜善、ちくま学芸文庫、二〇一〇年、三三—三四六頁
- (20) 『柳田國男全集』四、一九八九年、六六頁
- (21) 『柳田國男全集』八、一九九〇年、三二—二六頁
- (22) 同、六四九頁
- (23) 定本、第二十六卷、昭和五二(四五)年、二八六—二八七頁
- (24) 『日本国語大辞典』第二版、第一卷、小学館、二〇〇六(二〇〇〇)年、五四七頁
- (25) 『古事記』上巻、全訳注 次田真幸、講談社学術文庫、一九九八(七七)年、一四七—一四九頁
- (26) 『日本書記』(上)、全現代語訳、宇治谷孟、講談社学術文庫、二〇〇〇(一九八八)年、五四—五五頁
- (27) 註(24)
- (28) 註(7)、一二二頁
- (29) 同頁
- (30) 『嬉遊笑覧』(四) 喜多村筠庭著、岩波文庫、二〇〇九(二〇〇五)年、二二—二頁
- (31) 註(7)、一〇九頁
- (32) 同、一五六頁
- (33) Hiroko Ikeda, *A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature*, Helsinki, 1971 (FFC209), p.100-101.
- (34) Anti Aarne/Sith Thompson, *The Types of the Folktale*, 2. edition, Helsinki, 1987 (FFC184), p.135-137.
- (35) エスピノーサ『スペイン民話集』三原幸久編訳、岩波文庫、一九八九年、一八六—一八九頁(要約)
- (36) 註(25)、六〇—六七頁、黄泉国から逃げ帰るとき、イザナキノ命は蔓、櫛、最後に桃の実を障害物として投げ
- (37) バジール『ペンタメローネ』(下)、杉山洋子／三宅忠明訳、ちくま文庫、二〇〇五年、三四九—三六七頁(要約)
- (38) 註(34)
- (39) 註(11)
- (40) 註(23)
- (41) ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の研究』、斎藤君子訳、講談社学術文庫、二〇〇九年、六五—七〇頁
- (42) 同、六八頁
- (43) 註(7)、一〇九頁

- (44) 『御伽草子』(下)、市古貞次校注、岩波文庫、一九九〇年、一四〇頁
- (45) 註(17)
- (46) 註(7)、一〇八一—一〇九頁
- (47) 註(38)、三五七頁
- (48) Enzyklopädie des Märchens, Bd.10 (2002), S.350 (Die drei Orangen).
- (49) 註(17)
- (50) 註(18)
- (51) 註(8)
- (52) dtv Brockhaus Lexikon, 20Bde., Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982, Bd.20, S.267-268 (Zigeuner).
- (53) 阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、一九八一(七八)年、一五四—一七三(シブシー)
- (54) 註(52) S.267.
- (55) 同 S.268.
- (56) dtv Brockhaus Lexikon, Bd.8, S.99-100 (Hexe).
- (57) 『異端審問』ギー・テスタス／ジャン・テスタス、安斉和雄訳、白水社、一九九〇(七四)年(第五章スペインの異端審問)
- (58) dtv Brockhaus Lexikon, Bd.17, S.50-51 (Sklaverei).
- (59) 註(34) p.19.
- (60) 註(23)
- (61) Enzyklopädie des Märchens, Bd.2 (1979), S.700-726 (Braut).
- (62) 註(9) S.717-719.
- (63) Die Bibel, nach der Übersetzung Martin Luthers, Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1968, S.44.
- (64) 註(62)
- (65) 拙稿「中世ヨーロッパの伝説」(1)カロリング朝(『成城文藝』第二一六号、二〇一一年九月所収)参照
- (66) Enzyklopädie des Märchens, Bd.2 (1979), S.155-162 (Berta).
- (67) Brüder Grimm, Kinder-und Hausmärchen (KHM) (Rec-lam), Bd.1, KHM13/Bd.2, KHM89, 135.
- (68) Lutz Röhrich, Märchen und Wirklichkeit, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden, 1979 (74), S.112-113.
- (69) 註(68)
- (70) 『柳田國男全集』六、一二九—一三四頁
- (71) 註(68) S.3.

*本稿は本学「グローバル研究」プロジェクトの研究成果の一つとして発表するものである。